

大山街道八王子道・千人同心日光往還道ウオーク

計画

歩行距離 合計約9.8km＝約6.2km（青山バス停～東松山駅）＋約3.5km（武蔵松山城・吉見百穴）

集合 東松山駅東口バス停 2番乗り場 9時40分

第2回 上岡バス停から東松山駅（大山街道八王子道）

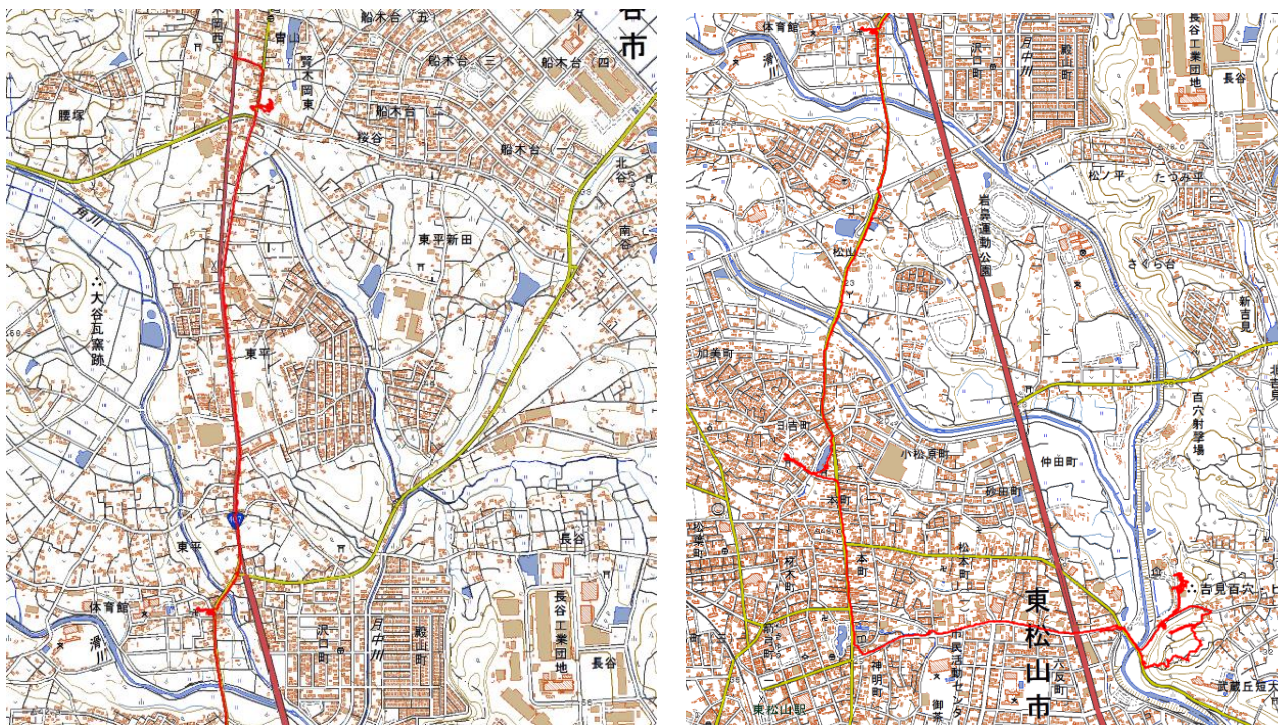
実施日 2020（令和2）年3月18日（水） 天候 快晴

参加者 折本 文夫、宇山 治男、中田 信義、中島 征雄 計 4名

コース 東松山駅バス停9:45⇒10:02青山バス停～根岸家長屋門～根岸友山・武香の墓～地藏尊と馬頭観音～角川～覚性寺～薬師堂～地藏尊（道標）～市野川・築瀬橋～上沼公園（WC）～松山神社～大山街道・東松山鴻巣線交差点⇒武蔵松山城～吉見百穴～岩室観音堂～百穴入口バス停⇒東松山駅

写真は、昨年2019年4月28日、5月8日と今回2020年3月18日のものを使用。

上岡馬頭から「根岸家長屋門」までは特になにもなく淡々と只歩くことになるので、今日の行程は青山（かぶとやま）バス停からスタートし、街道ウオーク終了後、武蔵松山城と吉見百穴を見学する。



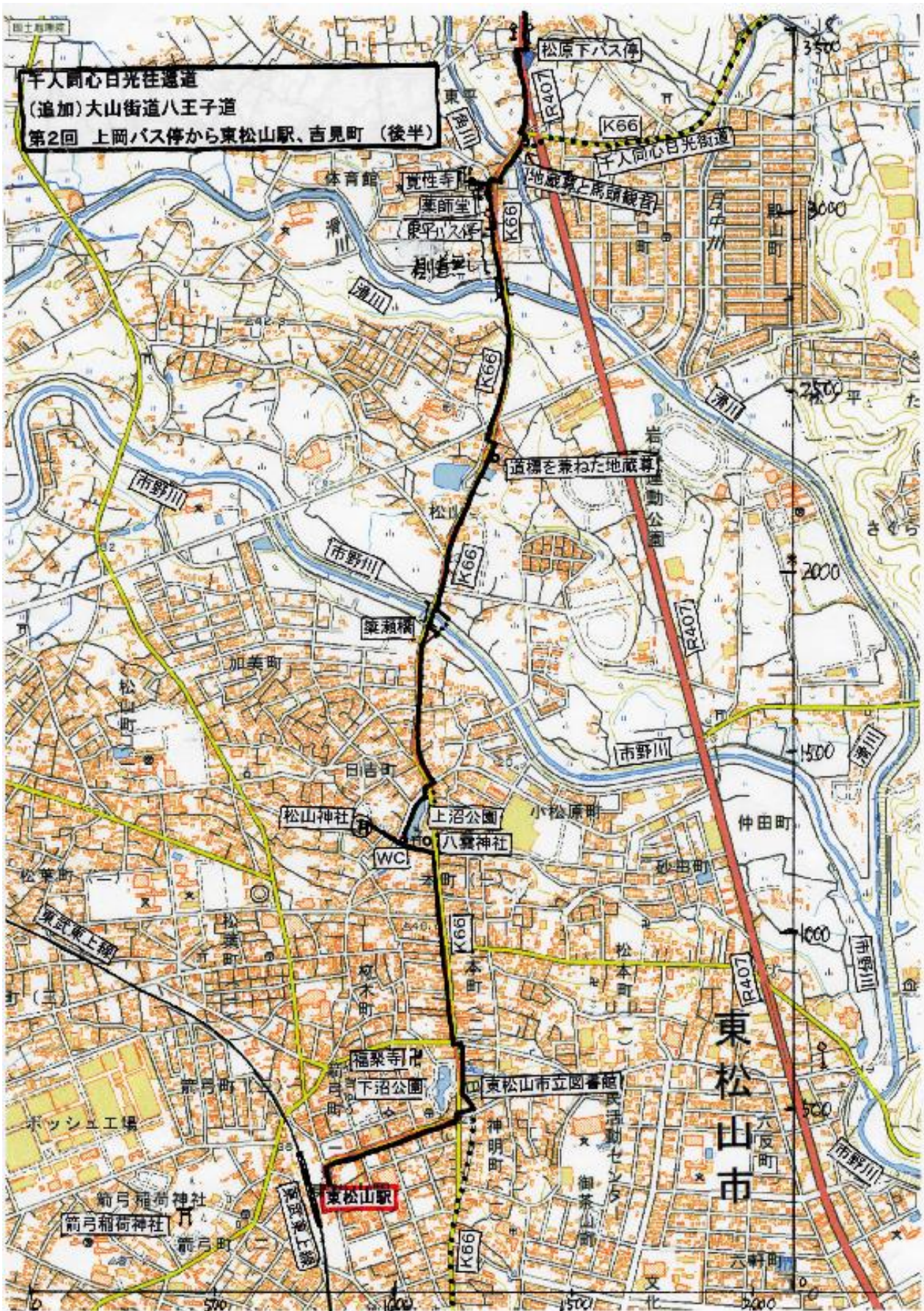
GPSデータ

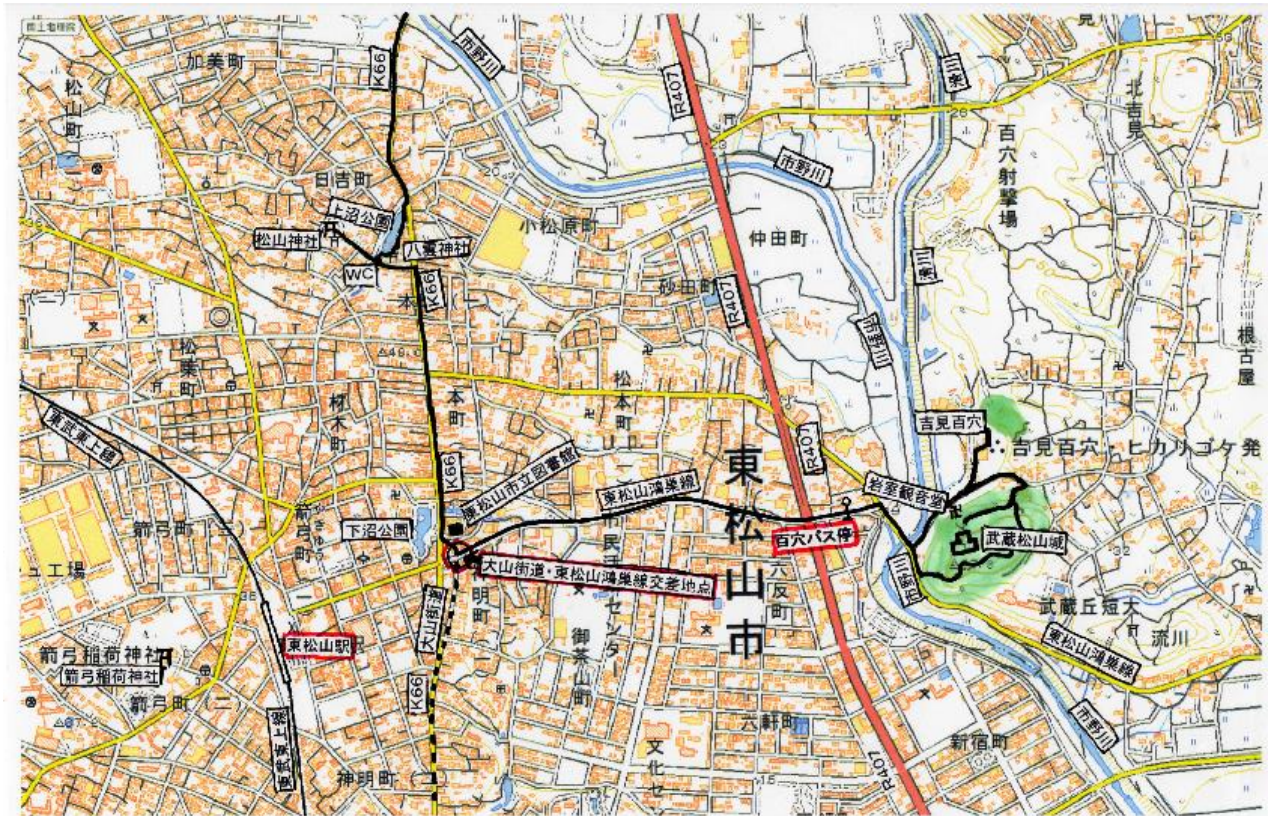
歩行距離：9.9km。 累計歩行距離：19.8km。

全体所要時間：3時間44分。移動時間：2時間49分。停止時間：55分。

移動平均速度：3.54km/h。全体平均速度：2.67km/h。

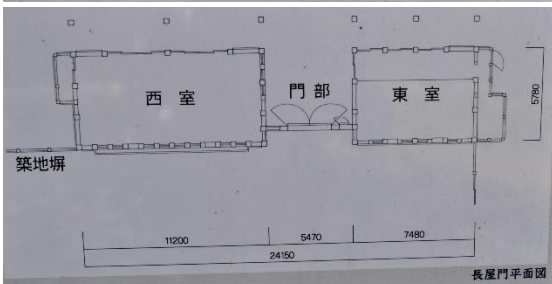
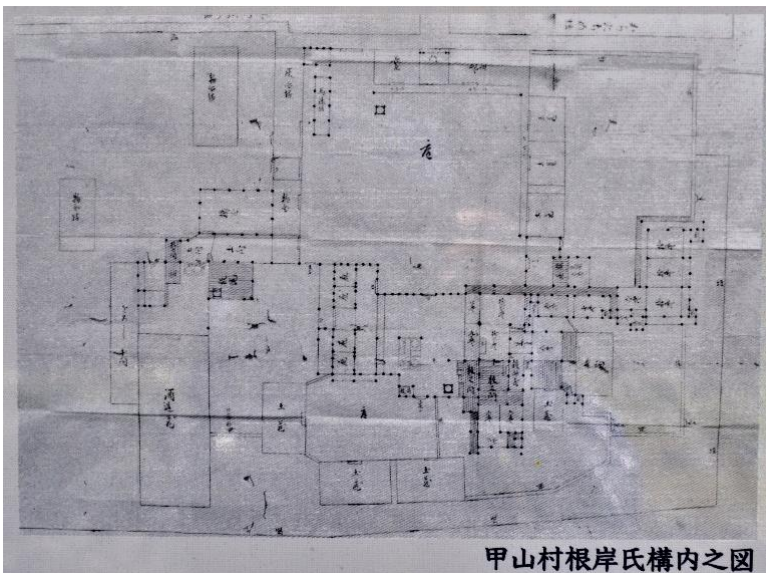
（青山バス停から大山街道・東松山鴻巣線交差点までの歩行距離 6.2km）





冑山バス停で降り、10時04分発。10m程戻った十字路を左折、国道を渡って小道を直進する。100m程の県道257号線を右折する。坂を上り切って少し下りになった所の左側に根岸家の立派な築地塀があり、左に入った奥に「根岸家長屋門」があり、道の反対側に根岸家の墓がある。





根岸家長屋門（熊谷市指定文化財 建築物）

■根岸家 根岸家は、江戸時代中期以降、甲山村、箕輪村の名主を務め、約80町歩以上の土地を有する豪農でした。

■長屋門構造 根岸家長屋門の構造は、入母屋造りの瓦葺きで壁材は土壁です。外壁は下部に腰壁部分が板張り、それより上部は漆喰仕上げで、門部分は壁面より後退し、右側に潜り戸を有しています。脇部屋には出格子窓に似た窓が配され、両脇部屋は使用人住居や倉庫、剣術道場として使われました。屋根裏部屋には、与力窓を両脇にそれぞれ二箇所備えています。

■長屋門規模 長屋門の規模は、桁行24.15m、梁間5.78m、面積約140㎡です。建築年代については、定かではありませんが天保11年(1840)の屋敷絵図にはすでに長屋門が描かれていることから、江戸後期の建築と思われます。平成15年3月 熊谷市教育委員会

長屋門の傍らに「根岸友山・武香の功績」の解説板と、金子兜太の句碑、友山・武香の説明板がある。

根岸友山・武香の功績

根岸家は、中世に活躍した熊谷次郎直実の末裔と言われ、戦国時代には、小田原北条方の、松山城主上田氏に仕え、のちに帰農し甲山に土着したと伝えられる。

根岸家は、江戸時代中期、享保元年(1716)甲山村の名主となり、宝暦四年(1756)には箕輪村の名主を兼ね、総計八〇町歩を所有する豪農となった。

■根岸友山は、文化六年(1809)に生まれ、幼名房吉。友山は号である。十六歳で十一代目伴七を襲名するが文武に励み、剣を北辰一刀流千葉周作、学問を芳川波山、林大学に学ぶ。友山は自邸内に私塾「三餘堂(さんよどう)」と剣術道場「振武所(しんぶしょ)」を設け、近郷の子弟の就学の機会を与えた。また、名主として治水築堤に尽力するが、天保十年(1839)荒川堤修復に際し、農民が川越藩へ訴え出る騒動(蓑負騒動みのおいそうどう)が起き、友山は農民側に与(くみ)したため江戸十里四方追放の刑を受ける。赦免後、尊王攘夷に傾倒し、寺門静軒や安藤野雁らの文人や長州・薩摩藩士との交流を深め、文久三年(1863)清河八郎らとともに浪士組に参加し京へ上洛する。その後、近藤勇らと行動を共にするが、帰郷し江戸警護の新徴組に加わる。明治新政府になってからは息子武香と共に文化活動に努めた。明治二十三年(1890)十二月没す。享年八二歳。大正元年、生前の功績により従五位を追贈される。墓地は県指定旧跡。

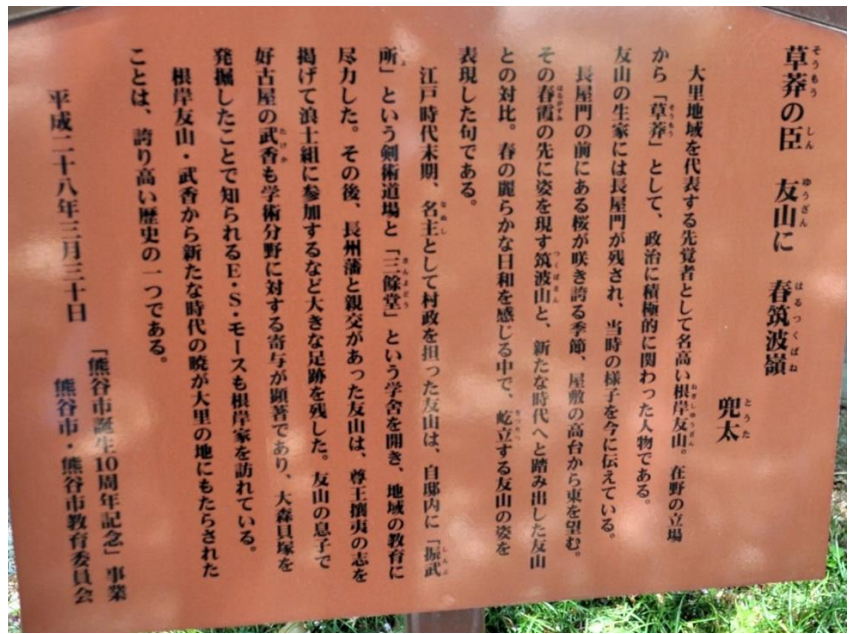
■根岸武香は、天保十年(1839)に友山の二男として生まれる。幼名新吉。剣を千葉周作、学問を寺門静軒、安藤野雁に学ぶ。明治元年(1866)地方大惣代に任じられて以降、地方行政に係わり初期学制の確立に尽力した。同十二年(1879)の埼玉県議会開設とともに県議会議員に選出され副議長となり、翌年第二代議長となる。同二十七年(1894)には貴族院多額納税者議員となる。一方、考古家として同二十年(1887)東京帝国大学の大学院生坪井正五郎と吉見百穴の発掘を行い、日本の考古学に多大な貢献を果たした。また、考古遺物や古銭、古美術、古文書等の収集に努め、一般に公開した。更に同十七年(1884)江戸幕府が編纂した「新編武蔵風土記稿」を内務省地理局から全八〇冊の刊行を実現した。明治三十五年(1902)十二月没す。享年六四歳。

このように根岸友山・武香父子は、大里町の近世・近代に多大な功績を残した。よって、ここに二人の功績を称え、町の偉人として後世に末永く伝えるものである。

平成十六年三月 熊谷市 根岸友山・武香顕彰会

金子兜太の句碑

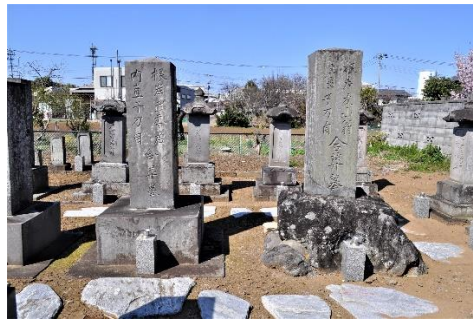
『草莽（そうもう）の臣 友山に 春筑波嶺』兜太



根岸家長屋門を出て、県道を挟んだ所に、「根岸友山・武香の墓。寺門静軒の墓」がある。



根岸家墓地



武香（左）、友山（右）の墓



寺門静軒の墓

県道を30m歩と進んだ十字路までが熊谷市で、ここで東松山市に入る。600m弱で国道に合流。



国道407号線との合流点から約1kmの東平交差点で右斜めの東松山市内方面への県道66号線に入る。



交差点で県道66号線を左へ行くと、吹上町から行田市、昭和橋で利根川を渡り、明和町から館林市から佐野市で例幣使街道の合流し日光へ向かう。(千人同心日光往還)

交差点の先、左一本目小路の角に地蔵尊と馬頭観音がある。



この前の細い道を右に行くのが千人同心日光往還道



その先、角川を渡った右側に「覚性寺」とその「薬師堂」がある。



覚性寺



薬師堂前の石仏・石塔



薬師堂

覚性寺

当山は、妙運山瑠璃光院覚性寺と称し天慶三庚子年下野守藤原秀郷の草創、勸修寺別當濟高大僧都の開基なり。

当山に伝わる「蘭若叢録」によると当時、東国の地に反乱をおこした平将門征伐の勅命を受けた秀郷が東国に赴く途中、夢に現れた翁のお告げに従い、紫雲出る松樹の下に熊野大権現（現在の熊野神社）を勧請しその霊徳により、将門を討ち取った。その後、もとの松樹より旃檀林の如く薫香たちこめ、薬師如来の尊容一体を得てこれを本尊とし、伽藍を建立した。故に、瑠璃光院と号し、瑞雲有るによって妙雲山と名づく、又のちに秀郷の法名を以って覚性寺とす。

その後、星霜六百七十有余年を経て松山城落城の砌、近郷の在家、兵火の為に塵芥に帰す。当山もその難逃れがたく一切伽藍ことごとく焼失するが唯一、薬師如来一体は難を逃れ今に伝わる。以来、当山はその薬師如来の靈験により多くの信仰をあつめたという。江戸文化年間には俳人一茶が旅の途中にしばし雨をしのいだとの記録もある。さらに明治の初めには、寺子屋がおかれ地域の子弟教育の場となり、現在の松山第二小学校の前身となった。

現在、真言宗智山派の寺院として弘法大師の教えと共に古来の法燈を今に伝えている。



街道を進み、滑川を松平橋で渡り、



坂を上って道路の下を潜る。 左側に道標を兼ねた地藏尊がある。



台座に「行田海道 四里」「熊谷海道 三里」とある。



築瀬橋で市野川を渡る。旧街道は少し下流を渡ったようだ。

坂を上って行くと右側に大きな池のある「上沼公園」があり、池の中にあずまやがあり、池の畔に八雲神社、トイレやベンチもあり、昼食とする。



昼食後、右奥の「松山神社」に寄る。

松山神社の由緒

松山神社の創建年代等は不詳ながら、康平6年（1063）に大宮氷川神社を勧請して創建したと伝えられ、氷川社と称していました。寛永元年（1624）には熊野神社（祭神伊邪那美命）を合殿に祀り、松山宿の総鎮守として崇敬を集めていたといひます。明治6年に社号を氷川神社熊野神社から松山神社と改め、昭和20年郷社に列格したといひます。



左・明神系鳥居と右・神明系鳥居があるのは珍しい。

境内社・浅間神社



本殿前

松山神社から上沼公園脇を通り、八雲神社前を過ぎた県道66号線（旧街道）を右折する。



松山神社の境外社である八雲神社の社殿は市指定文化財で、彫刻が素晴らしいとのこと。全く見なかったことは残念。

県道を進むと、本町二丁目交差点の先、右側に「下沼公園」、左側に「東松山市立図書館」がある。



図書館の先で街道は左に入り右カーブする。直ぐに東松山鴻巣線に出る。



この東松山鴻巣線は、東松山駅からの大通りで、大山街道八王子道は、この通りを横切って進む。

今日の「大山街道八王子道」はここまで。(12:16。ここまでの歩行距離は6.2km)

この後は、東松山駅から鴻巣駅（免許センター行き）のバスに乗り、百穴入口バス停で降り武蔵松山城へ向かう計画を変更し、1キロ半東松山鴻巣線を歩き「武蔵松山城址」と「吉見百穴」の見学に向かう。

旧街道から東松山鴻巣線に出、左折。道なりに進むと前方に武蔵松山城の小高い丘が見えてくる。

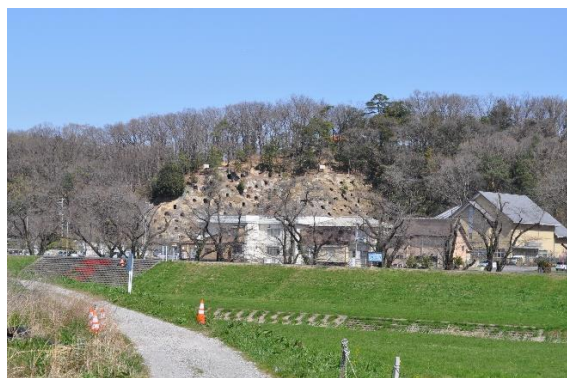


市民文化センター入口交差点

国道407号線交差点

百穴バス停付近より

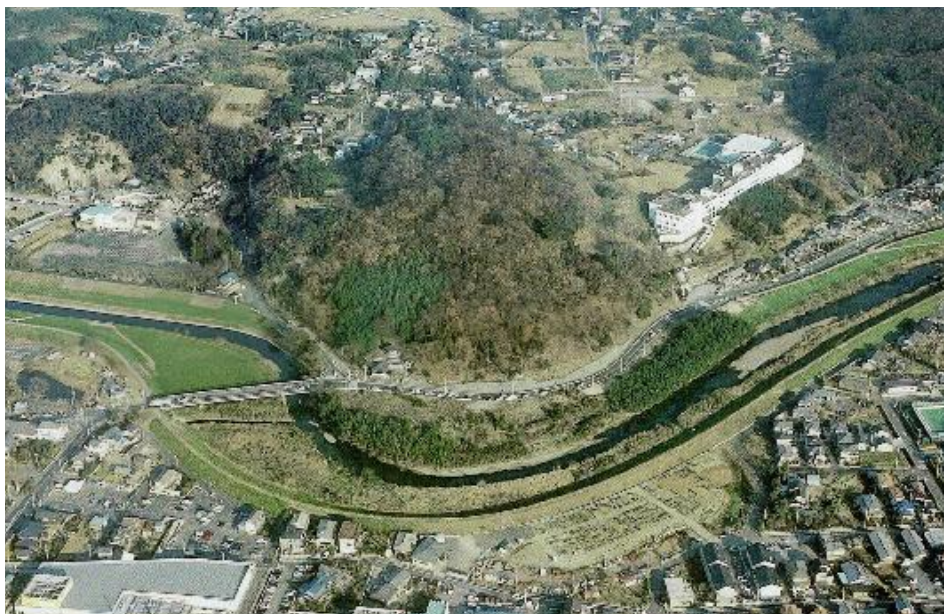
突き当たりを右折すると左手に「吉野百穴」が見える。



市野川を渡って三叉路を右に60m程行くと松山城址への登る階段がある。(12:37)



松山城址 (吉見町埋蔵文化財センター発行パンフレットより)



松山城は戦国時代、歴史の要所要所に出てくる、幾度もの攻防戦が行われた北武蔵屈指の平山城である。標高差約40mの細い急坂を上ると「本曲輪跡」がある。



本曲輪への階段

本曲輪跡

松山城跡

松山城跡は、平成20年3月28日に「比企城館跡群 松山城跡」として、「菅谷館跡（嵐山町）」「杉山城跡（嵐山町）」「小倉城跡（ときがわ町・嵐山町・小川町）」と共に国指定史跡になった。



松山城の立地

松山城跡の東には関東平野が広がり、一面の低地が続きます。西方の丘陵地帯には中世の山城が集中し、城の位置は北武蔵地域に広がる丘陵・山間部の玄関口と言えます。松山城は丘陵の先端部に築かれ、三方は市野川によって囲まれる要害の地にあります。度重なる氾濫によって、市野川の流域一帯には沖積地が広がり、湿地帯を形成しています。そのうえ、城の裾は荒々しく削り取られ急崖となっています。



本曲輪

松山城跡

この城跡は、市野川が形成した広大な低地に突き出た丘陵の東端に築かれており、戦国期に幾度もの攻防戦が行われた北武蔵屈指の平山城である。現存する城跡は当時の姿を良好にとどめており貴重な文化財である。

市野川に突き出た部分から本丸、二の丸、春日丸、三の丸が南西から北東に向かって一直線に並び、その両側に多くの曲輪や平場を持っている。また兵糧倉跡や物見櫓跡なども残されている。

城の歴史は古く、古代にさかのぼるとさえ言われるが、一般的には鎌倉時代末期の新田義貞陣営説、応永年間初期の上田左衛門尉説、応永二十三年（1416年）ごろの上田上野介説などがある。

しかしながら、城郭としての体裁を整えたのは、太田氏が、江戸、川越、岩槻の各城を築いた時期に近いものと思われる。

この城が天下に知られたのは、今から約四五〇年前の天文年間から永禄年間のことであり、城をめぐる上杉氏・武田氏・北条氏の争奪戦は有名である。のち豊臣勢に攻められて、天正十八年（1590年）に落城した。歴代の城主上田氏の滅亡後は松平家広の居城となったが、後を継いだ弟忠頼が慶長六年（1601）浜松に転封されたのを最後に廃城となった。

吉見町・埼玉県



本曲輪、二ノ曲輪、三ノ曲輪、惣曲輪と廻り、(伝) 搦手口から岩室観音堂に降りようとしたが道が崩れていたため、虎口から車道に出て「吉見百穴」に向かう。(13:01)



吉見百穴 一国指定史跡一

吉見百穴は古墳時代の末期（6世紀末～7世紀末）に造られた横穴墓で、大正12年に国の史跡に指定されました。横穴墓は丘陵や台地の斜面を掘削して墓としたものですが、死者が埋葬された主体部の構造は古墳時代後期の横穴式石室とほとんど同じです。百穴が分布する一帯は凝灰質砂岩と呼ばれる掘削に適した岩盤が広がっており、当時の人々は掘削するのに適した場所を探して横穴墓を造ったと考えられます。吉見百穴は明治20年に発掘調査が実施されていますが、わずかな写真と出土品を残すのみで詳細な情報はほとんど残っていません。現在確認できる横穴の数は**219**基です。



地下軍需工場跡

昭和19年末～20年の初め、吉見百穴とその周辺の丘陵地帯に大規模な地下軍需工場が造られました。今でも通行可能な直径3メートル程の開口部を持つ洞窟が地下軍需工場の跡です。地下軍需工場は

空襲を避けながら航空機の製造をする目的で造られたもので、縦と横の洞窟がそれぞれ交差し碁盤の目のようになっているのが特徴です。(中略)

軍需工場の区域となったのは松山城跡から岩粉坂までの直線距離にして約1300メートル部分で、軍需工場は大きく分けて「松山城跡下」「百穴下」「百穴の北側」「岩粉山近辺」の4工区あり、それぞれの工区は独立していました。(中略)

20年7月頃には機械が搬入されエンジンの部品が製造され始めた様ですが本格的な生産活動に移る前に終戦となりました。(後略)



天然記念物 ひかりごけ (大正五年 岸勝弥氏発見)

二・三の横穴の中には、こけが自生しています。このこけは、太陽の光に映えて黄金色に輝く「光ごけ」と呼ばれ、ほの暗い洞窟内や森林内の湿地に生える珍しい植物で、昭和三年天然記念物に指定されました。

このこけは、普通原糸体とともに生えて淡緑色か淡色かになっています。この原糸体はレンズ状の細胞がつながってできているため光線を屈折反射し黄金色にひかります。



吉見百穴を出、松山城跡西北の崖に沿って進むと「岩室観音堂」がある。



岩室観音と石仏

岩をうがって観音像（正観世音）をまつたところから岩室観音という。龍性院（真言宗智山派、岩室山）の境外仏堂である。

この観音のはじまりは弘仁年中（810～824年）といわれているが、たしかな記録は残っていない。

松山城主が代々信仰し護持していたが、天正十八年（1590年）松山城の攻防戦の際に兵火にあって当時のお堂は焼失してしまった。

現在のお堂は、江戸時代の寛文年間（1661～1673年）に龍性院第三世堯音が近郷近在の信者の助力を得て再建したものである。お堂の造りは懸造り様式で、江戸時代のものとしては、めずらしいものである。

また、ここにある石仏は、四国八十八ヶ所弘法大師巡錫の霊地に建てられた寺々の本尊を模したもので、八十八体の仏像がまつてある。

また、この石仏をおがめば、いながらにして四国八十八ヶ所を巡拝したのと同じ功德があるとされている。

平成十年三月

吉見町・埼玉県





松山城跡（伝）搦手口



岩室観音堂から市野川を渡り、駅方面に進み、百穴入口バス停からバスで東松山駅に戻る。



今日はここまで